

高橋峯次郎と七千通の軍事郵便

小田嶋恭二

TAKAHASHI Minejiro and Seven Thousand Military Letters

- ① はじめに
- ② 藤根村の概要
- ③ 峯次郎と明治・大正・昭和の三時代
- ④ 峯次郎の足跡
- ⑤ おわりに

【論文要旨】

藤根村という東北の貧しい農村に生まれた高橋峯次郎という一教師をとおして、彼が生きた明治・大正・昭和の三時代とはどういう時代であったのか、また村の指導者として日露戦争、満州事変そして太平洋戦争に、どのように関与し行動したかを考察する。

峯次郎という人間を考える上でのキーワードは、「貧しい農村」、「青少年教育」、「兵隊バカ」の三つである。これは、彼が生前六六年間書き続けた日記、三七年間発行し続けた『真友』、教え子から受け取った七千通を超える軍事郵便、生涯にわたって手がけた二冊の郷土史から拾い上げることができる。

彼は、藩政時代から繰り返して起る飢饉や百姓一揆の恐ろしさ、戊辰戦争の敗北により明治政府から疎外されてきた東北農村の歴史を聞いて育つ。苦学して師範学校を卒業し、教員となり村の青少年教育に情熱を注ぐが、戦争という暗い陰がいつも隣り

合わせてあった。日露戦争にも従軍し、戦争の悲惨さや家族に及ぼす影響を痛いほど知っていた。そのため、教え子が戦地に行って苦労しないよう軍事訓練をしたり、出征兵士に村の様子、家族の様子を知らせる『真友』や激励の手紙を送付した。時には異常なまで軍に協力する姿が、誤解され「兵隊バカ」と呼ばれることもあった。

昭和二〇年八月一五日敗戦という結末で太平洋戦争は終わる。これまで政治を信じ、軍部を信じ「兵隊バカ」とまで呼ばれ、国策遂行に協力したことに対し、敗戦を境にその指導責任を問われることになる。戦争で教え子を失い、これまで村の指導者としてとった行動が否定され、心に深い傷を負う。戦後、彼は戦死した教え子の霊を供養し、遺族たちの世話や恵まれない人々や子どもたちの世話をし、社会福祉に奉仕する。これは彼自身の戦争責任の取り方であり、また一つの人生のけじめのつけ方でもあったのではないか。

① はじめに

岩手県和賀郡藤根村（現北上市和賀町藤根）は人口三千人ほどの小村であるが、日清戦争（明治二七～二八年）には一人が出征し二人が戦死、日露戦争（明治三七～三八）では六五人が出征し四人の戦死者を出している。これに対し一五年戦争では延べ七二七人が出征し一三五人（男子村民のほぼ三分の一）が戦死している。なお岩手県の兵士の戦死者は約三万三千人にのぼり、全国の戦没者数は二五〇万人とも三一〇万人ともいわれている。

これだけ戦争が日常の隅々にまで迫ってきたのは、第一次世界大戦（大正三～七年）を境に飛行機や自動車、戦車、重火器が本格的に導入され、機動力、破壊力が飛躍的に増大し、近代戦争は総力戦、消耗戦とならざるを得なかったからである。

また、岩手は多くの陸海軍の頭官を輩出し、戦争指導にも県民は深くかかわっている。主戦論を展開し日米開戦時の首相となった東条英機陸軍大将、関東軍高級参謀として満州事変や満州国建国、日中戦争を推進した板垣征四郎陸軍大将や日米の対立の緩和と日中戦争の解決を目指した海軍の米内光政、二・二六事件で暗殺された斎藤実大将等がいる。

一方で、一兵卒として徴兵され戦地に赴いた多くの農民兵士はどうであったろうか。農村社会のなかで多くの農民は、義務教育の後は農耕に明け暮れるだけであり、軍隊以外に農民を対等に扱ってくれる社会は他になかった。農民が軍隊にあこがれを抱いたのは農村の生活の貧しさと閉鎖的な社会システムであり、岩手の農村は知らず知らずのうちに従順で忠勇な皇軍兵士の供給源となっていた。

和賀郡藤根村の高橋峯次郎は看護兵として応召従軍した日露戦争から帰還後、すぐに郷里の藤根尋常小学校に准訓導として復職した。以来、

昭和二四年、六六歳で新制中学校の助教諭を退職するまでの四三年間一度も他所で勤務することはなかった。召集され戦地に赴いた藤根村出身兵はすべて彼の教え子であった。峯次郎は、明治四一年（一九〇八）から昭和二〇年の敗戦直前まで、『真友』という郷土通信を月刊あるいは季刊として発行し、教え子の兵士たちに送り続けた。その教え子たちが戦地から峯次郎に宛てた七千通の軍事郵便が残されている。

② 藤根村の概要

七千通もの軍事郵便が送られてきた藤根村とは、いったいどんな村であったのか。その沿革について、峯次郎が生涯をかけて編集した『藤根村誌』と『藤根郷土史』の二冊の郷土史からみてみることにする。

（一）村の位置と気候

JR北上駅から西方に約八キロメートルのところに旧藤根村（現北上市和賀町藤根）がある。西から南にかけては標高一〇〇〇～一三〇〇メートルの奥羽山脈が、そして東から北には北上山系がめぐる平坦な土地である。村の南端を和賀川が、西から東へ流れている。北は旧笹間（現花巻市）、西は横川目、堅川目、南は岩崎、煤孫、東は江釣子（現北上市）と接する。地内を南北に主要地方道盛岡和賀線・県道岩崎藤根線、東西に国道一〇七号線とJR北上線が平行して通っている。

気候は東日本の太平洋側の気候区に属しているが、奥羽山脈と北上山系に挟まれているため、内陸性の気候の特性を呈して、気温の日較差・年較差がやや大きい。また冬季は日本海側の気候の影響を受けやすく、積雪量が比較的多い。平均気温は一～一一・五度、降水量は一二〇〇ミリ前後、年間の降雪量は二五〇～二八〇センチメートルであり、冬は一月下旬から三月下旬までの間雪で覆われる。夏はやませの影響を受

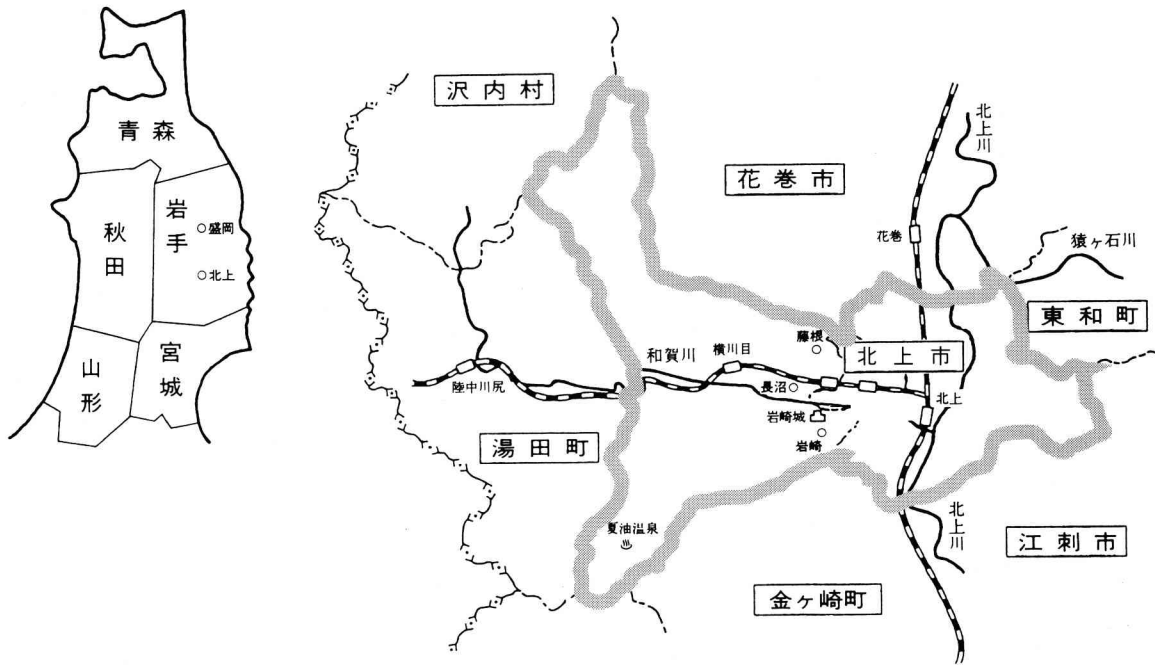


図1 現在の北上市

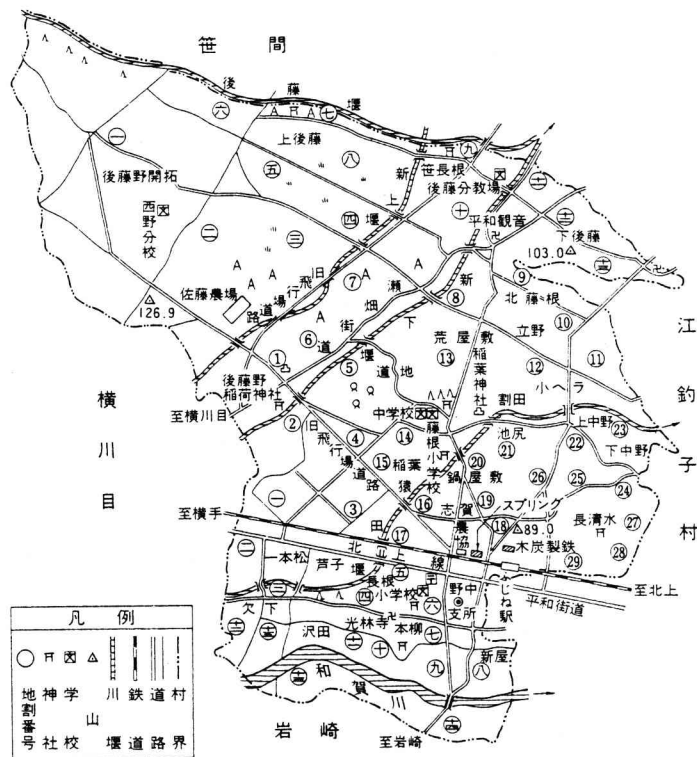


図2 旧藤根村図『藤根村郷土史』より

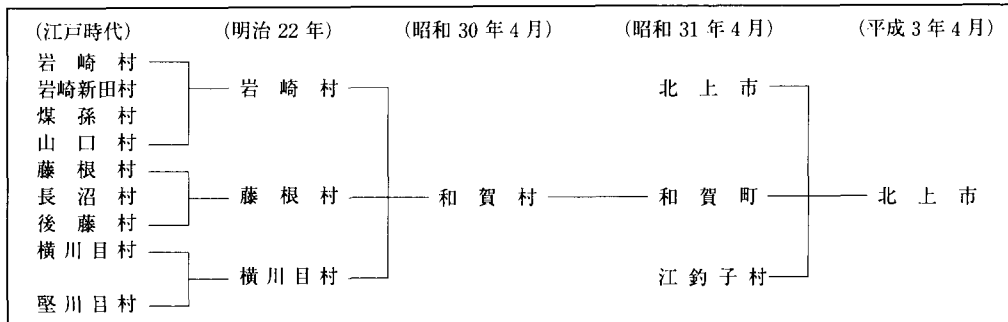


図3 行政区画の変遷

表1 旧藤根村の戸数と人口

年号	西暦	戸数	人口	一世帯当りの人口	参考文献
弘化3年	1846	235			藤根郷土史
明治5年	1872	277	1751	6.3	〃
明治23年	1890		2399		〃
明治27年	1894	306	2582	8.4	〃
明治37年	1904	315	3015	9.6	〃
大正5年	1916	330	2841	8.6	〃
大正10年	1921	382	2452	6.4	〃
昭和5年	1930	463	3037	6.6	〃
昭和10年	1935	491	3054	6.2	〃
昭和22年	1947	685	4112	6.0	岩手県統計年鑑
昭和30年	1955	699	4358	6.2	いきいき和賀町
昭和41年	1966	913	4702	5.1	和賀町の統計
昭和61年	1986	1193	4891	4.0	〃
平成12年	2000	1464	5348	3.7	北上市の統計

けることが時々あり、冷害となることもある。

(2) 行政区画の変遷と人口

藤根村は、現在市町村合併により北上市和賀町藤根となっている。その変遷経過は、図3のとおりである。藤根村を形成する地域は、明治元年（一八六八）まで仙台藩境に近く、盛岡藩の要衝として幕藩時代の歩みを続けてきたところである。明治三二年（一八八九）藤根村、長沼村、後藤村の三村が合併し藤根村が誕生し、その後昭和三〇年岩崎村、横川目村、藤根村の三村が合併し和賀村となり、翌年町制施行で和賀町が発足した。平成三年（一九九一）四月近隣の北上市、江釣子村と合併し北上市となり、現在の行政区画に編入されている。

藤根村の人口の推移は表1のとおりである。明治五年の人口はわずかに一七五一人であったが、明治三七年には三〇〇〇人を超え一世帯当りの家族数も九・六人で最高となっている。昭和一〇年には戸数四九二戸、人口三〇五四人、昭和三〇年には戸数六九九戸、人口四三三八人、そして平成一二年には戸数一四六四戸、人口五三三八人となり、およそ一〇年前の明治三七年と比較すると戸数で四・六倍、人口で一・八倍増加したことになる。しかし一世帯当りの人口は約三分の一に減っており核家族化が進行している。

(3) 村の産業

『藤根郷土史』によると、昭和一一年の藤根村の産業の主体は農業で戸数の九割を占める。戸数四九二戸の内、農業四四〇戸（八九・六％）、林業一戸、工業三戸、商業一〇戸（二・〇％）、賃労働二二戸（四・五％）、その他一五戸（三・一％）である。同じく耕地面積は、田七〇九町一反歩、畑二七九町一反歩、林野八六〇町八反歩、村有林野四五町三反歩であった。この内、田一九七町七反歩、畑八一町五反歩は藤根

村以外の不在地主が所有者であり、実際には田五一町四反歩、畑一九七町五反歩が村民の分であった。一戸当り平均田で一町歩、畑で四反歩の所有であった。戦後開田される後藤野以外の土地は、すでに開田され尽くしており、そのため大半の農家は二男、三男に分け与えてやる土地はなかった。また零細な小作農家で、稲刈りが終り冬仕度の季節になると、生活の糧を得るために出稼ぎにすることが通例であった。

(4) 村の歴史

昔、藤根は「垂井たらいの里」と呼ばれた。「足る井たらい」で、豊富な清水の湧く里であった。村の中央に鎮守の森「阿弥陀堂」があり、またすぐ近くには和賀・稗貫・紫波三郡の当国三十三観音二八番札所「藤根観音堂」がある。この観音堂境内に昔左巻きの巨大な藤があり、「その根は臥龍の如く、蔓は境内に繁る木々にまつわり、春の花の季節には紫の雲が境内を覆うかと思われるばかり」であったという。藤根の地名はこの藤の大樹に由来すると伝えられている。

藩政時代にこの広大な原野が開墾され新田開発が行われた。寛文八年（一六六八）松岡八左衛門が猿田堰（松岡堰ともいう）を、そして延宝三年（一六七五）奥寺八左衛門が上堰、同七年（一六七九）には下堰を完成させた。両堰による水利は周辺の二三カ村に灌水した。寛文八年の検地では松岡新田三八〇〇石余、貞享三年（一六八六）検地では奥寺新田七六〇〇石余となり盛岡藩最大の開田事業となった。この新田開発は藩にとって喜ぶべきことであったが、農民たちには必ずしも喜ばれたわけではなかった。後に凶作、飢饉そして百姓一揆の原因となるのであった。高冷地の南部盛岡藩では三〇四年に一度の割合で不作・凶作が発生し、藩の苛政と相まってしばしば飢饉となった。中でも、元禄・宝暦・天明・天保の飢饉はひどく「南部藩四大飢饉」と呼ばれ、藩の人口が二五万人前後の時に二万五千人から五万人の飢死者がでた。凶作は無理な

新田開発にも原因の一つがあった。

延享元年（一七四四）黒沢尻通の村々を中心に二千余人が立ち上がり、盛岡に強訴している。藩では一揆の要求を全面的に認めだが、後に首謀者に対しては厳酷な処罰で臨んだ。この時、下藤根の千葉四郎右衛門など首謀者五人が打首獄門となった。しかし鬼柳通や黒沢尻通では、この後も一揆は続き、慶応二年（一八六六）の山口・煤孫・岩崎村を中心に起きた凶作による減税一揆が盛岡藩最後の一揆となった。百姓一揆の口火をきるのはいつも和賀郡の農民であった。

明治になると文明開化のもと政府は、富国強兵・殖産興業の政策をとる。欧米の近代的技術・制度・風俗習慣などを積極的に移入した。市町村合併もその一つであった。また秋田県平鹿郡横手町（現横手市）と岩手県和賀郡黒沢尻町（現北上市）を結ぶ平和街道（国道一〇七号の前身）が明治一五年に開通し、西和賀諸鉱山の開発を促進させた。大正一三年には横手駅と黒沢尻町駅（現北上駅）を結ぶ横黒線（JR北上線の旧名）が開通し、ますます産業活動が活発になっていった。

ところが農業政策においては、地租改正によって土地所有制が確立したといっても、その骨子は幕藩領主制的支配から地主制的土地所有制への移行であった。農業生産の中心は地主であり、小作人の大半は、依然として変換することのない封建的土地制度のもとにあった。したがって、小作人には何等恩恵を与えない結果となった。岩崎、横川目、藤根の三カ村内に田畑、山林、原野等の土地を所有している大地主のうち、村外の人は大正初期で六〇%にも達していた。この不在地主は、黒沢尻町の貸金業者や商人の金持ちで、商業資本家であった。そのため、自作農的独立の道に恵まれないで、零細自作ないし小作の地位のままであった農家も多かった。

昭和に入ると、昭和四年の世界大恐慌、波状的に襲ってくる冷害による凶作、そして昭和六年の満州事変を契機に始まった一五年戦争によ

り、東北農村の疲弊は激しくなり、娘の身売り、欠食児童の増加、小作争議の多発などが社会問題となった。そのため、働く土地を持たない農家の二、三男対策として満州への開拓移民計画や経済更正活動が推進され、農民に働き口を与えるための農村工業の振興や救農土木事業が盛んに行われた。また村の行事も青年訓練や軍事講演会などが次第に多くなり、時代は軍国色へと大きく流れを変えはじめていた。

藤根村では、満州事変から太平洋戦争が終わるまでの一五年間に七二七人が出征し、一三五人の戦死者を出している。また銃後では昭和一三年六月から後藤野飛行場の建設が始まり、九月に秩父宮殿下の御臨席のもと後藤野飛行場献納式が行われた。この飛行場は、岩手県下の一二十万人もの青少年の勤労奉仕によって建設され、竣工後もこの勤労動員は終戦まで続けられた。昭和二〇年八月九、一〇日に米軍機の空襲を受け、その五日後には終戦を迎えるが、八月一〇日にはこの飛行場から最後の特攻隊が飛び立っている。

戦後、和賀町は広大な土地を利用し大規模な開田と圃場整備事業を行い、大型機械を積極的に導入し、米を基幹作物とする産業の推進を図ってきた。しかし、昭和四五年からの米生産調整、四八年のオイルショック、五〇年代の高度経済成長から低成長への政策転換による不況、昭和五五年から五八年までの冷害と過剰投資による農家の負債問題、さらには農畜産物の自由化など農業をとりまく環境が大きく変わった。また一方で企業誘致と地場産業の育成に伴い、農業後継者に目されている若者は農業を継がず二次、三次産業に就職している。専業あるいは第一種兼業農家は、離農したり第二種兼業農家に移行し急速に農業人口が減少してきている。

③ 峯次郎と明治・大正・昭和の三時代

(1) 生いたち

高橋峯次郎は、明治一六年一月五日岩手県和賀郡藤根村字後藤の百姓円次郎の三男として生まれる。兄弟一〇人の末っ子であり、父円次郎は四六歳、母りきは四〇歳であった。

円次郎は一町歩の水田だけでは家族の生活を支えることができず、農事のかたわら桶屋をして日銭を稼いだ。父は峯次郎が小学校四年を卒業すると、桶屋の手伝いをさせた。桶屋の小僧をし、百姓の手伝いをしながら少年期を育っていく。

峯次郎は、自分たち百姓の置かれている恵まれない現実を意識し、これからの新しい時代に対し、学問を身につけのし上がろうと決意する。そのきっかけのひとつは、ある暑い盛り、母と二人で田の草取りで泥田を這い回っていた時、水田の向こうの道路を真っ白い洋服を着た青年紳士の通るのを見た時だったと言う。峯次郎は、「今にオレもあのようになって見せる。」と母に語ったそうだ。その後、自分の入った後藤分教場に行つて小原三太郎先生に頼んで勉強を教えてもらい、明治三五年四月岩手師範学校講習科（盛岡にあった）に入学する。当時、師範に入学するには、抜群の成績あるいは士族の子弟か大財産家の子弟でなければ入学できなかった時代である。新進気鋭の青年教師に変貌を遂げた彼は、明治三六年三月師範学校を卒業し、同年七月から九戸郡山根村木売内尋常小学校へ赴任し初めて教壇に立つ。

木売内尋常小学校へ赴任して半年たった明治三七年二月日本はついにロシアに対し宣戦を布告した。陸軍は、それにとまって次々に若者たちを召集令状を発して軍隊に集めた。峯次郎に召集令状が来るのはもはや時間の問題であった。彼は三月に郷里のすぐ近くの笹間小学校に転任

しそれに対処した。

(2) 日露戦争従軍

峯次郎は、岩手師範学校在学中の七月徴兵検査を受け合格した。翌明治三六年三月卒業し家に帰ると、それを待ちうけていたかのように軍隊から召集令状が来た。四月一日には弘前野砲兵第八聯隊第四中隊に入営する。この召集はわずか三カ月間の教育召集であり、六月三〇日に軍隊生活を終えて帰ってくる。

明治三七年二月日露戦争が始まり、六月七日に仙台の第八師団に動員令が下った。この動員令で、東北部隊が大陸に行つて激烈な戦いをするのである。峯次郎も六月一〇日召集を受け弘前野砲兵第八聯隊に入隊した。彼はすぐ看護兵に選ばれ陸軍看護学校に入学する。看護兵として軍務にたずさわったことで、彼は生涯人間の生命をみつめ、大切に生き方をしたのだとも考えられる。

明治三八年七月二四日弘前を出発し、宇品港から大連、奉天、英守屯、双樓台、慶雲保舍營病院、鉄嶺兵站病院と戦場を歩き、翌三九年三月一七日弘前で召集解除となる。その間、日本兵に切られた満人を手当したり、峯次郎自身高熱や腸空扶斯にかかり生死の境をさまよう体験もし、やつとこのことで日本へ帰つて来る。彼は、勲八等瑞宝章と日露戦役従軍記章をもらつて郷里へ凱旋した。藤根に帰ると年老いた両親から家の借金が一七〇円もあり、去年凶作であつたことを聞かされる。この日露戦争で藤根村からは六五人が出征し、四人の戦死者を出した。岩手県からは一二六〇人余の戦死者を出している。

二年間続いた日露戦争は日本軍の勝利で終わったが、中国に派遣された郷土部隊の弘前歩兵第三聯隊は、黒溝台や奉天の会戦など激戦の戦場を進んだ。零下三〇度の降雪の中での激戦で悲惨を極める戦いであつた。第三聯隊は、この戦闘だけで戦死者三四〇余人、負傷者一〇八〇余

人も出している。看護兵であつた若干二二歳の峯次郎青年は、この戦いで何を見たのであろうか。

(3) 峯次郎の教育理念

日露戦争から帰つてきた峯次郎は、六月から郷里の藤根尋常小学校に復職する。それから以後、昭和二四年に新制中学校の助教諭を退職するまでの四三年間、藤根村から一歩も出ることはなかった。尋常小学校、青年学校、新制中学校と勤務は変わるが、四三年間にわたつて郷土にとどまり藤根の青少年を育て続ける。

彼は、地域の学校教育はその地域の生活の中に根をおろして行われなければならぬという教育理念を持っていた。彼の教育のやり方で目をひくのは、青少年団の育成に力を入れたことである。記録によると、明治四三年七月に「藤根少年真友会」という少年団を誕生させた。団員は一二歳から一六歳までの男子で、団員になるには試験があつた。また少年団の訓練内容は、夜学・お話会・体操・野外訓練・見学・遠足・水泳・柔道・雪中行軍・講話等であつた。大正二年七月にスカウト訓練を取り入れた「藤根少年団」と改名した。大正四年一月大日本少年団に全国最初の加盟団として藤根少年団が加盟する。大正一一年四月に東京で第一回少年団日本ジャンボリーが開催された。その時、団長峯次郎は一〇名の団員を連れて参加した。当時汽車も見なかったことのない貧しい田舎の少年たちが、ボーイスカウトの制服制帽に身を整え岩手県から参加したのである。また少年団活動に音楽を取り入れ、楽隊を組織し村の行事を飾つた。

一見、峯次郎はモダンボーイにも見えるが、一方で泥にまみれ地を這う農民魂を子供たちに身を以て示した。教え子の故加藤勝夫氏は次のように語っている。

「昭和七、八年頃だったと思うな、当時農村は不景気のドン底だった。その救済事業として和賀川の改修事業が九年間にわたって行われたが、藤根の人達も工営所に行くといつて沢山出て、その土方仕事をした。木箱で土砂利を背負って運んで、あの大きな長い堤防をつくったもんだ。ところが、当時の高等科の生徒や青年学校の生徒も、学校を欠席して沢山それに出るので、授業ができなかったんだな。しかし、百姓は生活が苦しくて金をとるためなもんだから、学校としては打つ手がなかったんだ。その時、高峯先生は、自分から和賀川の川岸に教科書を運んでいって、子供たちに勉強を教えたんだな。今、ああいう先生が何人いるかな。夕方、長い竿の上さ日の丸をつけて、その作業現場の堤防の上さ立てて、集合、集合って叫んだな。仕事が終わって、帰る子供たちをおさえて川岸の堤防の上で、日が暮れるまで勉強したんだな。その思い出が、その人達には強く灼きついて残っているんだ。大きな川岸で、赤い夕日を背にして勉強した思い出というものは美しいんだな。」

また忘れられないのは、実弾をこめて鉄砲を撃たせられたことだな。少年団の訓練だといって、後藤山の沼のそばにテントを張って、夜営するんだな。そして夜は、その沼から幽霊の出る話をした後で、一人づつ沼を廻る肝試し会をやったり、鉄砲に実弾をこめて沼の方さ一人づつ打たせたりするんだな。後ろからだき抱えるようにして、銃床を肩さしっかかり押しつけてくれて、引き金を引かせるんだな。それをやったことで、何か自分は別な人間に成長でもしたような不思議な気持ちになったもんだね。いずれ、少年団員は今でも云えば、藤根のエリートだったな。」

峯次郎は教え子たちから高峯先生と呼ばれ、まるで兄貴のように慕われた。また少年団をつくり集団訓練を取り入れた教育を実践していた。

本当の教育とは何かを知っていたように思える。

(4) 兵隊バカ

昭和六年九月満州で日本軍と中国軍が衝突(満州事変)し、以後一五年間続く大戦に突入していく。昭和七年満州建国がなされ、昭和八年に満州移民大計画をたて、東北を主とした農民が次々に満州に移民して行った。更に昭和一二年日華事変が勃発し、東北の主力部隊が満州から北支、中支、南支へ進軍していく。この戦争へのなだれこみと共に後藤野に飛行場建設運動が起こる。それは、昭和一二年八月頃から藤根村内の西にある広大な後藤野の草原とそこにある農地をひっくるめて飛行場をつくって陸軍に献納しようという運動であり、後藤野陸軍飛行場期成同盟会により一〇万坪が買収された。そして、翌年六月から地元の勤労奉仕隊はもとより県下の青年団や学生等が連日炎天下の後藤野に群をつくって集まりその土木作業をした。竣工する一〇月までに一二万人余の奉仕隊が実働した。奉仕団の宿舎には近郷の小学校が当てられ、作業の指揮には近郷の在郷軍人会が当たった。

この時、峯次郎は藤根在郷軍人会長であったが、かけがえない農地を献納せざるを得ないということもあり、飛行場建設運動には消極的だったようだ。しかし、一人息子(友次郎)も、家督となるはずの娘婿(忠光)も戦場に赴いていたし、また青年学校の指導員という立場でもあった。連日出征家族の家を回って面倒をみたり、率先して駅頭に立つては兵士を送り、村の遺族を歩き回って激励し続けた。また後藤野で飛行場建設作業が始まると、体中に水筒を吊って水を配って奉仕隊を激励して歩いた。自分の教え子が生き残って帰って来てほしい。そのためには、力を合わせ銃後を守り、みんなが戦地の兵隊を応援しなければならぬ。そんな峯次郎の胸中を彼の行動から感じ取ることができる。

しかし、峯次郎の異常な程の献身的な姿を見て、彼のことを「兵隊バ

カ」と呼ぶ者もいた。村の全ての人が好意的に思っていた訳ではなかったのである。出征兵士を出していない家の人たちにとっては、戦争は他人事であり彼の協力的な行動が異常に思えたのだろうか。

政治を信じ、軍部を信じていた峯次郎は、当時国策遂行に全力を注いで協力した。彼は晩年次のように語っている。

「丈夫な強い人間を育てなければならぬと思った。戦争を知っている私は、戦争は勝たなければならぬと思った。弱い者は、戦場でどれ程苦勞するかを私は知っている。負け戦はどれ程悲惨なものであるかを私はこの目で見て来ている。そして戦争に勝つためには、銃後もしっかりと強くならなければならぬ、と私は思っている。」

峯次郎が教え子に望んだのは、もちろん名譽の戦死ではなかった。しかし、それを口に出せば非国民となる時代であり、『真友』によって村の様子や家族の様子を伝えることで、生きて帰る意欲を持たせようとしたのではないか。この『真友』には、現地で任務を果たしたら元気で帰ってこいという意味が込められていたと思える。

峯次郎の思いとは裏腹に太平洋戦争末期には、戦死公報が相次いで届く。そして昭和二〇年八月一五日本国の敗戦という結末で長く苦しかった戦争は終わる。

(5) 戦後の峯次郎

日本は、昭和二〇年八月一五敗戦を迎えた。峯次郎の生き方は根こそぎひっくり返った。村の人たちは彼の今までの指導に怨嗟の目を向けた。峯次郎はその時の心境を『藤根郷土史』に次のように記している。

「太平洋戦争は、日本の敗戦となり終戦となった。さて平和となり復員して帰郷する兵もあるが、待てども待てども帰ってこない兵士はその数知れぬ。子息をなくした親たち、夫を失った婦人、たよるものなき子どもたち、また路上や車中で憐れみを乞う白衣の傷病兵あり、住む家なき人もあると思うと、心は暗くなる。

自分は日露戦争を体験し、戦争はどういうものであるかを知っている。七十歳近い両親をおいて従軍したが、常に忘れることのできないのは家の暮らしのことであった。明治三九年から藤根の学校に勤め、一〇年、二〇年、三〇年と続いたが、常に戦争の悲惨さを忘れることができなかつた。平和であっても、いつ戦争が起きるかかわからない。子どもの時から強く勇ましく正しく育てるつもりで、少年団やボーイスカウトの育成、また青年団、軍人会の指導をしてきたが、遂にまた戦争となつてしまったので、ますます熱をかけて世話をした。青年を薦めて軍隊に志願させたり、入隊官兵の送迎や世話をしたり、その家族を見廻り慰問をし、また会報（真友）を発行して激励と連絡をとつたりなどしたので、みんなに兵隊バカといわれたり、狂つたのかとも言われたこともある。

今となつてはしかたがない。戦没者やその遺族たちにすまないことをした。心がますます暗くなる。ウラマレタリ、ニクマレタリ。しかし、いまになつてどうにもされぬ。ただあやまり、おわびして霊をまつり、霊を供養し、遺族たちの世話をしあけるよりほかに。」

峯次郎は、別人の如く変貌した。短気で強引だった彼は、どれ程人に罵倒されても、一言も反駁しなかつたという。モダンボーイさながらの背の高いハンサムなイメージは、もうどこにもなくなつていた。よれよれの形のくずれた服を着て、戦時中の戦闘帽をかぶり、ガタガタの自転

表2 高橋峯次郎の略歴と郷土及び日本のできごと

年号	年齢	峯次郎略歴	郷土のできごと	国内のできごと
明治一六年	〇	一月五日峯次郎誕生。		
明治二三年	七	四月藤根尋常小学校入学。		
明治二七年	一一	三月藤根尋常小学校卒業。		
明治三五年	一九	四月岩手県立師範学校乙種講習科入学。七月徴兵検査合格。		日清戦争始まる。
明治三六年	二〇	三月岩手県立師範学校乙種講習科卒業。四月一日第八師団野戦砲兵第八聯隊に三ヶ月教育召集。七月三日九戸郡山根村木壳内尋常小学校へ赴任。		日露戦争始まる。
明治三七年	二一	三月八日和賀郡笹間尋常高等小学校へ転任。六月八日第八師団充員召集のため退職。六月一二日第八師団野戦砲兵第八聯隊に充員召集。一二月二四日陸軍看護学校卒業。		
明治三八年	二二	一月二五日砲兵一等兵。三月二六日陸軍看護兵。七月二四日弘前から大連、奉天へ出征。九月発熱で入院し死にかける。		
明治三九年	二三	三月一七日召集解除。六月二七日和賀郡藤根尋常小学校准指導。		
明治四〇年	二四	一月娘リキ生まれる。		
明治四一年	二五	六月九日「真友」第一号発行。		日韓併合。
明治四二年	二六	八月福島県に在る兄菊次郎に会いに行く。		第一次世界大戦始まる。
明治四三年	二七	七月「藤根少年真友会」を結成。		
明治四四年	二八	三月息子友次郎生まれる。	盛岡騎兵聯隊後藤野で演習。	
大正二年	三〇	七月藤根少年真友会を「藤根少年団」と改名。		第一次世界大戦終わる。
大正三年	三一	一二月後藤分教場に転勤。		
大正四年	三二	八月一日スエと結婚。		
大正一年	三九	四月少年団日本ジャンボリーに参加。		
大正二年	四〇	三月二四日藤根ボーイスカウト隊長。		
大正三年	四一	三月二六日父円次郎死亡。		
大正一五年	四三	一月一八日藤根少年赤十字団副長。	県下で陸軍特別大演習行われる。	
昭和三年	四五	三月娘リキ、忠光と婚姻。		
昭和四年	四六	五月二九日友次郎横須賀へ出発。	農村不況。北藤根に赤痢流行。	満州事変勃発。
昭和五年	四七	七月兄菊次郎死亡。	米価大暴落。	
昭和六年	四八	七月忠光勤務演習で弘前へ。		
昭和七年	四九	三月三一日藤根尋常高等小学校退職。四月一日帝国在郷軍人会藤根村分会長。四月五日藤根青年訓練所指導員嘱託。		
昭和八年	五〇	一月母りき死亡。一二月岩手県藤根村金銭債務臨時調停委員。	六原道場開設。三陸大津波。	満州移民計画大綱発表。
昭和九年	五一		藤根村も政府等より義捐金。	東北地方凶作。娘の身売問題化。
昭和一一年	五三	一〇月一五日藤根青年学校指導員嘱託。	恩賜倉庫建てられる。青年学校の開設。土畑鉦山鉦毒問題。	県内の小作争議件数最高となる。

昭和二年	五四	四月藤根村会議員当選。	後藤野岩手陸軍飛行場献納。	日華事変起きる。
昭和三年	五五	一〇月六日銃後援尽力のため知事表彰。		
昭和四年	五六	二月『藤根村誌』発行。九月二八日教育功労者として県知事賞。		
昭和五年	五七	一月一〇日岩手県少年教護委員。五月二日青年学校学務委員。六月一三日満州慰問へ出発。		
昭和六年	五八	九月一五日藤根青年学校指導員。		
昭和七年	五九	三月三〇日最後の『真友』発送。	八月九、一〇日後藤野飛行場空襲。	八月一五日太平洋戦争終戦。
昭和八年	六〇	三月三十一日藤根村助役臨時代理者。四月一日藤根中学校校助教諭。		
昭和九年	六一	四月一日岩手県民生委員。		
昭和十年	六二	三月三〇日藤根村社会教育委員。九月三〇日藤根中学校校助教諭退職。		
昭和十一年	六三	平和観音堂を建てる。		
昭和十二年	六四	九月大田村山口に疎開している高村光太郎を訪問。一〇月五日藤根村教育委員。		
昭和十三年	六五	和賀町民生児童委員		
昭和十四年	六六	藍綬褒章。		
昭和十五年	六七	勲五等瑞宝章。		
昭和十六年	六八	『藤根郷土史』編集。五月一六日死亡。		
昭和十七年	六九			
昭和十八年	七〇			
昭和十九年	七一			
昭和二十年	七二			
昭和二十一年	七三			
昭和二十二年	七四			
昭和二十三年	七五			
昭和二十四年	七六			
昭和二十五年	七七			
昭和二十六年	七八			
昭和二十七年	七九			
昭和二十八年	八〇			
昭和二十九年	八一			
昭和三十年	八二			
昭和三十一年	八三			
昭和三十二年	八四			

車に乗って連日のように村中を回った。肩からは、終戦時の放出物資である軍馬に飼料を与える時に使うズツク袋をぶら下げていた。そのため、彼の姿は乞食と見間違われるようなこともあった。

終戦直後、峯次郎は自分でつくった紙芝居を自転車に乗せ神社の境内などで子どもたちに見せて歩いた。また村の恵まれない人々や子どもたちをみると、食べ物を持って行ったり、お金をあげたり、一緒に遊んだりした。一方で、ゴミ捨て場からいろいろなものを拾ってきて利用した。また家屋の新築があるのを聞きつけると、出かけて行って、捨てられている物の中から古文書や古い道具などを拾い集めてはもらって帰った。彼は民生児童委員、司法保護司、社会福祉委員、町史編集委員、教育委員、金銭債務調停委員などおびただしい程の公職をもっていた。昭和二六年に平和条約が結ばれ進駐軍が去るのを待って、平和観音堂を建立する。また生涯を通して手がけてきた『藤根郷土史』を編集した。

④ 峯次郎の足跡

(1) 軍事郵便と『真友』

峯次郎の子孫にあたる高橋良八宅に大正から昭和にわたって七千通を超える郷土出身兵士たちから送られて来た軍事郵便が残っている。その内容は、『真友』送付の御礼、軍隊生活・任地の風物、戦争の状況報告、恩師（高峯）、郷里、農作業、家族への心情などが記載されている。兵士の多くが村の情報を知りたいため、また村とのきずなを確かめあうため、恩師である峯次郎を通じて交信したのであった。

彼は、藤根村の小学校教員と青年訓練所の教員を兼ねていた。また同時に在郷軍人会の役員として、村の軍事関係の指導者であった。それだけでなく、明治四一年から昭和一九年まで実に三八年間発行し続けた郷土通信ともいべきミニコミ紙『真友』を発行していた。それは、村の

出来事、農事関係、徴兵関連、銃後の家庭巡りなどであり、主として郷土出身者の兵士たちに送られた。藤根村出身兵士たちはこの情報を待ちこがれるようになり、『真友』が送られてくるとむさぼるように読み、すぐに返事と自分の現況を書いて出した。

戦地の兵士たちが知りたかったのは、自分の出征したあと誰が出征したか、出征した友人たちは何処に居るのか、村の銃後の状況、自分の出征後の農事はどうなっているのかなどであった。そして兵士たちは、軍事郵便で戦地の様子や誰に会ったかなどを峯次郎に知らせた。その郵便内容は、峯次郎によって編集されて『真友』に掲載され、戦地の兵士に送られた。この繰り返しによって、七千通もの軍事郵便が峯次郎宛に来たのであった。一日に何通もの軍事郵便が毎日のように彼のもとへ届いた。

軍事郵便の数をみると、昭和一二年の日華事変を境にして急増加して、一四年には七九五通に達している。特に目を引くのは、昭和一三年から一八年までの六年間の軍事郵便が他の年代と比べずば抜けて多いことである。発信地は、日本国内からのものを除くと満州が一二四〇通で最高で、次に北支九五九通である。ところが昭和一三、一四年の日華事変直後だけは北支が満州を上まわっている。これは当然村の出征兵がどこかの戦場に行っていたかと一致するものである。

『真友』は、明治四一年六月一〇日に第一号が発行される。発行者は「真友園」となっている。発行趣旨は次の七項目を掲げている。

真友ハ何故ニ生レタルカ

- ・真友ハ諸君ニ信友タランガ為ニ生レタリ
- ・真友ハ信義ヲ以テ村内皆信友タランガタメニ生レタリ
- ・真友ハ諸君ニ宝ヲ授ケンガタメニ生レタリ
- ・真友ハ諸君ニ智識ヲ与ヘンガタメニ生レタリ

・真友ハ諸君ニナルベク利益ナコト、ナルベク新ラシキコトヲ知ラセ
ンガタメニ生レタリ

・真友ハ良キ友ヲ奨励シ、悪シキ友ヲ良キ友トセンガタメニ生レタリ
・真友ハ即チ信友ナリ、諸君大ニ使用シ有益ナル事ヲ投書サレンコト
ヲ希望ス

同年六月三〇日発行の『真友』第二号では、発行者を「真友園」から「藤根真友会」に改名している。明治四三年二月二四日発行の『真友会報』に「本会生レテココニ三歳、未ダ幼稚社会ニ何等ノ益与フルナシ、実ニ笑止ノ至リナリ、然ルニコレヨリ一ノ目標ヲ立テ會員諸君ハ相協力シテ改良ヲハカラン」とあり、次のとおり組織の目標を掲げている。

- 一、目的 本会ノ目的トスルトコロハ學術ノ進歩新知識ノ交換、風習ノ改良、心身ノ鍛錬、共同心養成、勤勞ヲ尚ブ習慣等ヲツクルニアリ
- 一、以上ノ目的ヲ達センガタメ適當ノ時ヲ撰ビ會員集合シ事物ヲ研究スルコト
- 一、真友紙ヲ発行スルコト
- 一、有益ナル雑誌ヲ読ムコト
- 一、會員ハ本村ニ居住スルモノハ男女間ハズ入会ヲ許ス
- 一、特ニ小学校生徒及壮丁前ノ者ハ是非入会スルノ義務ヲ有ス
- 一、会費、本紙ノ実費一円及ビ雑誌買入費トシテ一ヶ月当分五厘ト定ム、不足分ハ有志者ノ寄附ヲ仰グコトトス

峯次郎は、藤根尋常高等小学校を基点として、長沼と後藤の各学校に支部を設置し学校の一部を借用して、新聞・雑誌・書籍の縦覧を行った。また小学校読本の読み方、夏蚕の飼育法・珠算・裁縫などの補習

会・講習会も行った。

明治四四年頃より真友は、在郷軍人会と協同して編集されるようになり、発行者として「藤根村分会」「帝国在郷軍人会」の名が登場するのは、大正二年頃からである。事務所も藤根尋常高等小学校から藤根村役場へ移動することになる。

真友の頒布先は、主として分会会員・在営兵であるが、その後、藤根村全戸・藤根村出身の村外在住者及び出征兵士へ拡大している。関係機関への届出として、内務省図書館、盛岡地方裁判所検事局、盛岡内丸帝国在郷軍人会盛岡支部、黒沢尻警察署などへも発送している。大正一〇年頃の発行部数は二〇〇部程度であったが、その後四〇〇部、六〇〇部と増え、昭和一七年七月二五日発行の真友は七五〇部が第一線に発送されている。そのため、いろいろな問題や困難がともなっていた。一つは、発行部数が多いので発行経費や郵送料が莫大な金額となったこと、二つ目に戦争が激しくなるにつれ用紙の入手が困難になったこと、三つ目に言論の統制抑圧により、『真友』の内容の検閲も行われるようになったことであった。峯次郎の日記には、『真友』のことたびたび警察に出頭を求められたこと、検閲の結果記事が削除され、そのため印刷所から至急不足原稿について入稿するよう催促がきていたことが記されている。

出征兵士にとって、峯次郎から送付されてくる『真友』はどのような意義があったのだろうか。それについて軍事郵便から見えてみることにする。

高橋庄蔵の軍事郵便（昭和一二年四月二〇日）より

「時々皆々様から新聞や雑誌等も送って戴きますが、郷里の事など詳しく知るものには『真友』以外に有りません。先生の童顔を拝しつつ御話する様な、又郷里に居る様な感じが致します。」

高橋徳兵衛の軍事郵便（昭和一四年二月八日）より

「郷里から御出し下さる手紙は、皆な詳しいことは高峯先生からの真友を御覧下さいと書いてあります。村の様子を知るには真友は一番、家のことは矢張りカカの手紙です。」

高橋哲郎の軍事郵便（昭和一五年一月一四日）より

「兄無き後は、家よりも便り無く唯『真友』を故郷よりの慰問便として待って居ります。」

千田善八の軍事郵便（昭和一六年一月二三日）より

「高峯新聞は隅から隅までくり返しくり返し読んだ。そして有難い有難いと流れるなみだ。」

千葉末喜の軍事郵便（昭和一八年）より

「最近銃後は紙不足に付き『真友』の発行出来ずと伺って銃後と戦線のニュースは遮断されたと思つて居た所へでしたから、本当に嬉しかったのです。」

現在残っている『真友』のうち、最終発行のものは昭和一九年三月三〇日発送したもので、峯次郎がはがきに謄写版で刷ったものである。これは宛名本人不在のため返送にされたもので、四枚残っている。はがき一枚に出征兵士のがぎつしり書かれている。最後に「第一線の皆さん元気で頑張れ、男一匹安売りしてはならぬ。郷里異常なし。」という文面が、痛々しく感じられる。戦争末期の昭和一九、二〇年は、もう戦地も内地も軍事郵便を書いたり、配達したりする状況でなくなっていたことがうかがわれる。

(2) 藤根少年団とボーイスカウト

故高橋友次郎氏（峯次郎の長男）によると、藤根のボーイスカウトが日本で第二位に誕生したことになっているが、本当は第一位だったとい

う。峯次郎は英国にボーイスカウトという少年団があるということを兵隊に行った時に聞いた。後に郷土出身の後藤新平さんに照会し調べてもらったら、成程いいものだった。日本がこれから世界的視野に立つて生きていく若者を育てなければならん、といって早々に結成したのがボーイスカウト藤根隊だった。ところが、藤根が第一隊で東京が第二隊では具合が悪いと、後藤新平さんに頼まれて藤根が第二隊になったという。峯次郎はそのことを残念がって、話していたという。

この真偽についてはともかくとして、当時、東北の一寒村に日本最初のボーイスカウトを誕生させた彼の発想と気概には驚かされる。

『岩手のボーイスカウトの歩み』に次のように掲載されている。

「英国のベーデンパウエル卿により創始されたボーイスカウト運動は、明治四二年北条時敬氏や蒲生保郷氏により初めて日本に紹介されたが、明治四四年六月イギリス皇帝ジョージ五世の戴冠式に東伏見宮依仁親王に随行渡英した乃木希典大将が、ロンドンのスカウト集会を視察し、またベーデンパウエル卿と会い、日本武士道を取り入れたと言うこの訓練に共鳴、帰国後学習院において講演や三週間の天幕訓練等を実施した。

岩手県においては、和賀郡藤根村（現在の和賀町）の高橋峯次郎氏が、小学校卒業後の子供達が暇にまかせ遊んでいるのを見て、補習教育を始めようと明治四三年少年の会（少年真友会）を結成、訓練していたが、大正二年戦友と言う雑誌に掲載されたボーイスカウト運動を紹介する乃木大将の記事に共感、藤根少年団を結成。大正三年九月小柴博氏等が東京少年団を結成し、大日本少年団を準備中なのを新聞で知り、昭和四年一月三〇日最初の加盟団として、大日本少年団に加盟したのである。」

大正一一年四月一三日から東京で開催された第一回日本ジャンボリーに、峯次郎は一〇名の団員を連れて出場した。かつて、羽織袴で村道を駆け回った少年たちが、ボーイスカウトの制服制帽に身を整えて岩手の代表として上京し、東京隊と堂々と交歓会を行ったのである。

昭和一七年頃まで活動は続いたが、太平洋戦争のため活動は途絶えた。戦後、各地でボーイスカウト結成の運動が盛んになり、昭和二六年藤根に「和賀一〇隊」が峯次郎の協力により誕生する。

峯次郎のおこなったボーイスカウトの訓練は、具体的にはどんなものであったのだろうか。また『岩手のボーイスカウトの歩み』の中のOB座談会で、教え子であった故高橋純逸（ボーイスカウト元県連理事）が次のように話している。

「私がボーイスカウトに入ったのは、たしか大正一三年頃だと記憶しています。小学校の高峯先生、この人は兵隊気狂いのような人で、日露戦争に従事したが自分は戦死しないで帰った。このことに對して御恩がえしのため何かしなければならぬということ少年会をつくり、この少年団運動に入ったのがキッカケであります。

分教場にいたものだから、昔の三八式銃の払下げをうけて空砲をぶっ放してみたり、分教場に泊められて墓場に行くいわゆる試胆会や、昔は今のような道路が舗装されていないため道路が悪いので、ぬかるみの補修をするとか、そのようなことが主で。あるいは夜学会とかが主だったわけですが。ちょうど私、小学校を終り青年学校時代に深尾先生の書いたスカウト読書、あれをみてそれから今のボーイスカウトの訓練に入ったわけですが。

これを機会に、班の組織なんかをこしらえ、各部落毎に今でいう堀立小屋をつくり、これを巢にして運動をはじめたというようなこととです。（中略）

しかし、今のように育成会のようなものはないから、もっぱら高峯先生のポケットマネーからお金（ユニホームを買うお金等）がでていた。（中略）

当時は理解がなく、西洋かぶれしたとかなんとか盛んにやられて、あれは特権階級の人たちがやるもんだという考え方の人が多かった。（中略）

昭和五、六年頃はほとんどが軍事訓練で、何かすれば露営と称していた。当時の指導者の人達は大抵軍人が多かった。従って自然とそう（軍事訓練）なっていた。」

ボーイスカウトの制服に身を整え、大きなラッパや太鼓を鳴らして各行事を飾った光景は、新しい時代を進む藤根のイメージを近郷に植え付けることになったのである。

(3) 平和観音堂

峯次郎は、昭和二六年自宅から五〇〇メートル程離れた県道の側に平和観音堂と鐘撞き堂を建てる。彼は村の青年に軍隊志願をすすめたことや軍隊に協力した行為を率直に認め、それを戦没者やその遺族たちに申し訳ないことをしたと正直に詫びている。その罪滅ぼしとして、平和観音堂を建立したというのである。

しかし、彼は敗戦になって突如として平和観音堂建立を思い立ったのではない。昭和一二年頃から、出征した教え子たちが戦場に行つて血を流した時、その土をひとサジ取つて手紙に入れて送つてよこすようにと書き送っている。また「戦地の記念品として、書でも絵でも本でもよいかから何か送られないか」とも書いている。これに応える内容の軍事郵便が多数残っている。

高橋孫治の軍事郵便（昭和一六年九月）には、「乗っていた軍艦が暴

風雨に遭い遭難し、その時に艦の中の物を海中に棄ててしまい先生より頼まれし支那の土も失つてしまい残念です。」とある。

高橋善一の南支からの軍事郵便（昭和一四年二月頃）には、「先生の希望して居られます土の件、上陸地の川砂と現地の土を同封しました。御笑止下さい。」とある。高橋善一が北支から手紙と一緒に封筒に土を入れて出したら、検閲でひっかかりアヘンと誤解され、憲兵に事情聴取されたこともあったという。

各戦場から次々に送られてくる尊い土を彼は保存していた。その土で聖観音像と軍馬のための馬頭観音像二体を造り、平和観音堂の本尊として祭っている。

峯次郎は、平和観音堂を建立した翌二七年九月稗貫郡太田村（現花巻市太田）の山口山荘に疎開していた高村光太郎を訪ねている。目的は、観音堂への揮毫のお願いであった。光太郎はこの飾りつきのない峯次郎を気に入り、平和観音堂のために次の歌を墨書して贈っている。

観自在こそ たふとけれ

まなこひらきて けふみれば

此の世のつねのすがたして

わが身はなれず そひたまふ

また峯次郎は、昭和二八年四月に東京巢鴨拘置所のA級戦犯の人たちの慰問にもでかけ、荒木貞夫大將ら一〇名とも面会している。この一〇名の戦犯者たちは、後に平和観音堂に「遺芳万古」と墨書した額を贈つてきている。

峯次郎は、永久の平和と戦没英霊を崇め祭るため、平和観音堂を建立し自ら堂守となって生涯ここで梵鐘を撞き供養した。

⑤ おわりに

峯次郎の最後の教え子にあたる池田友敬氏は、彼の生き方や教育に対する考え方について次のように話している。

「高峯の生き方の原点は、人間はつながらなければならない。組織を持たなければならない。そうすると人と人とのつながりの中で自ら社会の規制というものをわかることができるし、それが戦地に行っても、社会に出ても非常に強くなれる。ということではないだろうか。だから、そういう意味で地域でいろいろな訓練をさせたり、ボーイスカウトの協力をしたり、集団意識を高揚させたりしたのだと思う。」

高峯は、戦地の教え子に村の様子、留守宅の状況、出征者の消息などを記した郷土通信『真友』を身銭をきって、一年に五〜六回戦地に送り続けた。それに応えるようにして戦地から軍事郵便が届いた。故郷に家族や田畑を残してきた兵士にとって、『真友』は戦地と気がかりな故郷を結ぶ実に有り難くも頼もしい存在だった。だから軍事郵便となってもどつてくる。あの七千通もの軍事郵便は偶然に集まったのではない。その前に高峯の、人間孤立すると大変だという思いが『真友』となつて発送され、それに応えるように軍事郵便がもどつてくる。その繰り返しで七千通もの膨大なものになったのである。

これまで農村になかった集団というものをまとめあげ、集団で行動させる。集団意識を持たせたのは、高峯であった。農集団を組織化し、そして社会人にさせてやるという、いわば現在でいう社会教育の原点が高峯の教育の中心であったのだ。」

峯次郎の亡くなった翌年教え子たちが、平和観音堂の前に彼の胸像を建てた。その碑文には次のように刻まれている。

彼は世俗に叛逆し、新しいものを求めて前進した

彼は兵隊ばかりといわれながら若者たちに生きとおす道を教えた

彼は行者の姿で自分と世のために梵鐘をついた

彼は信じるもののため自分を曲げず、常に弱者の友であった

彼は郷土史に人の道を求め、この土地のために生涯を捧げた

そして、胸像の台座の側面には、次のような建立の趣旨が刻まれている。

高峯先生、そう口にするだけで私たちは心温まる懐しさを感じる。そして何かもつとたいせつなことに努力しなければならぬといふ思いにかられてくる。先生は明治十六年にこの土地に生まれ、同三十六年に力学して師範学校を卒業してから、生涯を教育と社会福祉のために捧げられた。

先生は自分の人生に苦悩し、藤根の世俗に叛逆しながら、それ以上郷土を愛した。その深い人間愛に根ざした失意を知らない実行力は、常に人々に理想の火をともしてくれた。

昭和三十七年藍綬褒章をうけられる等、その功績は数多くの功勞章に輝いたが、先生は常にてらいのない行者の態度で人びとに接し、特に恵まれない人びとの友として生涯を終えた。

私たちは、この土地が先生を生んだことを誇りに思う。ここに相集つて先生の遺徳を頌し、長く後世に伝えて敬慕しようとするものである。

昭和四十三年八月十五日

峯次郎が書いた日記に「小学校教育やめても、村の教育忘れられぬ」と記してある。彼の八四年の生涯は、今日の私たちに戦争とは何か、真の教育とは何かを具体的に行動をとおして教えてくれたことである。

参考文献

高橋峯次郎編 一九四〇 『藤根村誌』 藤根青年学校
高橋峯次郎編 一九六七 『藤根郷土史』 高橋忠光
菊池敬一 一九八三 『七〇〇通の軍事郵便―高橋峯次郎と農民兵士たち―』 柏樹社
岩手・和私のペン編 一九八四 『農民兵士の声が聞こえる』 日本放送出版協会
山下文男 二〇〇一 『昭和東北大凶作』 無明舎出版
和賀町 一九七七 『和賀町史』 和賀町
角川日本地名大辞典編纂委員会 一九八五 『角川日本地名大辞典三 岩手県』 角川書店
和賀町合併三〇周年記念誌編纂委員会 一九八七 『いきいき和賀町―合併三〇周年記念誌―和賀町』 和賀町
『縮刷版 広報わが』 和賀町
北上市立博物館 一九九五 『平成七年度特別展図録―戦後五〇年の北上を考える歴史資料展―』 山川出版社
長江好道ほか 一九九五 『岩手県の百年』 山川出版社
日本ボーイスカウト岩手連盟 一九七九 『岩手のボーイスカウトの歩み』
加藤昭雄 一九九五 『最北の特攻出撃基地―後藤野―』 川嶋印刷株式会社
細井計編 一九九五 『図説 岩手県の歴史』 河出書房新社
めんこいテレビ制作 二〇〇一 『FNSドキュメンタリー 土に生きる―故郷・家族、そして愛―』 岩手めんこいテレビ
NHK制作 一九八二 『NHK特集ドキュメンタリー 農民兵士の声が聞こえる』 日本放送協会

(北上市農林部、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇〇二年四月三〇日受理、二〇〇二年六月二八日審査終了)

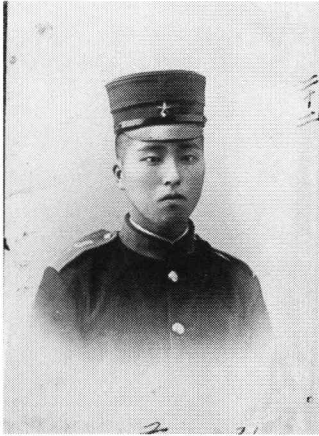


写真1 日露戦争に従軍したときの峯次郎

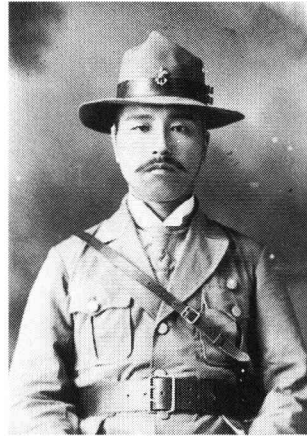


写真2 ボーイスカウト藤根隊長時代の峯次郎



写真3 昭和14年の陸軍飛行場建設勤労奉仕記念章



写真4 藤根青年学校時代（前列左から3人目が峯次郎）

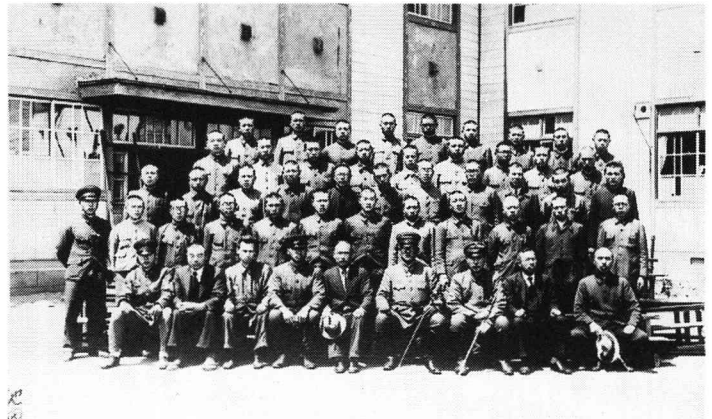


写真5 昭和18年の壮丁



写真6 真友（右は昭和16年1月号、左は昭和19年3月号）

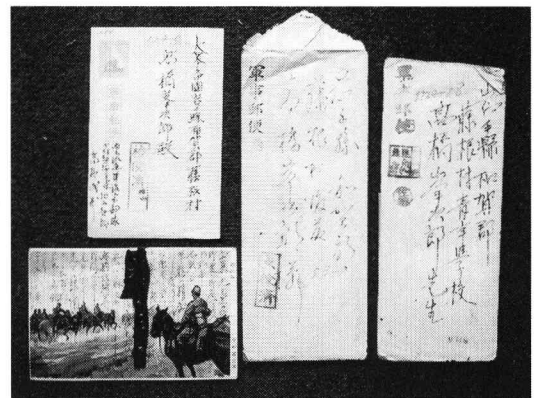


写真7 峯次郎宛の軍事郵便

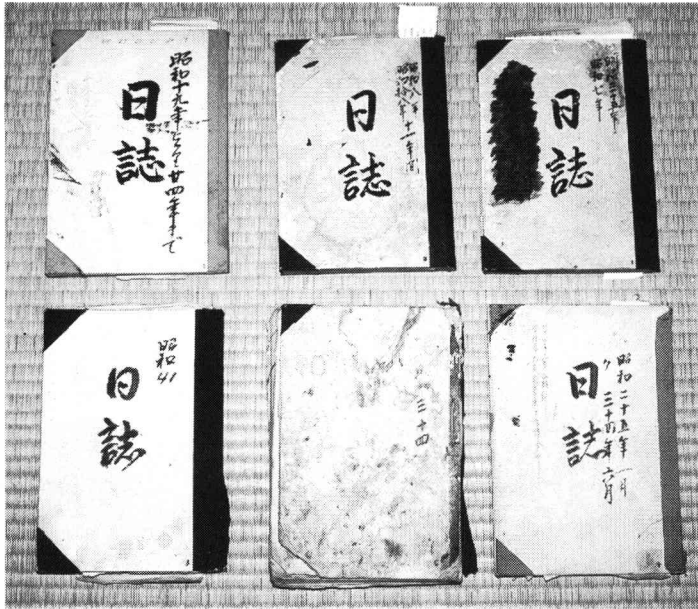


写真8 峯次郎が66年間書き続けた日記6冊
(明治35年から昭和42年まで)



写真9 平和観音堂と収蔵庫

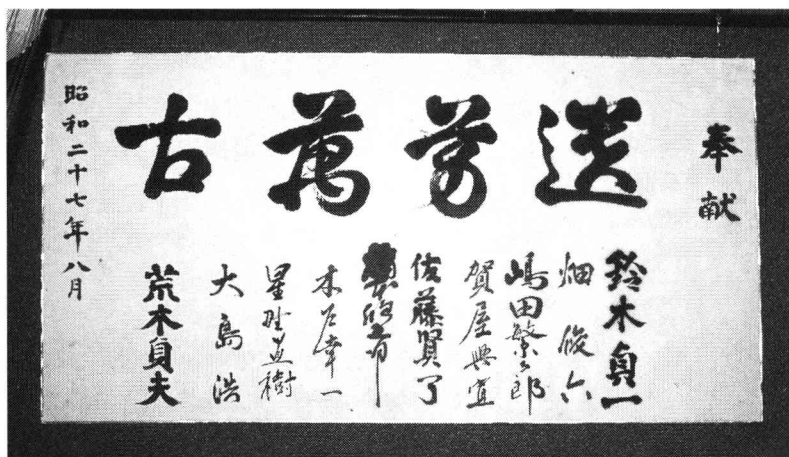


写真10 A級戦犯から贈られた「遺芳万古」と墨書した額



写真11 教え子が送付した戦地の土で
つくった馬頭観音と聖観音

TAKAHASHI Minejiro and Seven Thousand Military Letters

ODAJIMA Kyoji

This paper looks at the life of educator TAKAHASHI Minejiro, born in the poor village of Fujine in the Tohoku region of Japan, and attempts to shed light on the three eras—Meiji, Taisho, and Showa—in which he lived, as well as on his involvement, as a village educator, in the Russo-Japanese War, the Manchurian Incident, and the War of the Pacific.

Three key concepts that need to be kept in mind with regard to Minejiro are: “poor farming village”, “youth education”, and “military enthusiast”. Minejiro’s relationship to these key concepts can be seen in his diary, which he kept for sixty-six years until his death, in the SHINYU (True Friend), which Minejiro continuously issued for thirty-seven years, in over seven thousand letters sent to him via military mail from former pupils, and in the two volumes of local history, the compilation of which was his lifework.

Minejiro grew up being told stories about the horrors of famine and peasants’ revolts, which repeatedly occurred since the days of clan rule, and learning the history of the Tohoku villages which, since their defeat in the Boshin War, were alienated from the Meiji government. He worked his way through a school of teachers’ course and became a teacher, putting his energies into the education of the youths of the village, but the dark shadow of war was close at hand. Minejiro had served in the Russo-Japanese war and was acutely aware of the miseries of war and its effect on families. Therefore, he made his pupils do military drills so as to make it easier for them when they were called to the battlefield and sent copies of SHINYU, containing news of the village and their families, together with encouraging letters to the soldiers. At times, Minejiro’s exceptionally cooperative attitude towards the military was misconstrued, causing him to be called a “military enthusiast”.

The War in the Pacific ended in defeat for Japan on August 15, 1945. With Japan’s defeat, Minejiro, who until then had put his faith in politics and the military to the extent of being called a “military enthusiast”, suddenly found himself questioned with regard to his responsibilities as an educator and his cooperation with national policy. With the loss of his former pupils in the war and the denunciation of his former actions as an educator, Minejiro experienced heavy grief. After the war, Minejiro devoted himself to social welfare activities, holding memorial services for those former pupils who died in the war and looking after bereaved families and deprived children. One might conclude that this was his way of accounting for his war-guilt and one way of taking responsibility for his own choices in life.
